

第一回 国立動物園を考えるシンポジウム

「動物園は野生動物を救えるか 新たなる動物園への道」

講演全文 小菅正夫「今、なぜ、国立動物園なのか？」

みなさん、こんにちは。

正田先生は入れ歯を忘れてもあれだけはっきりと分かりやすい話をするのですが、私に入れ歯はないんですが、多少早口であることと、何を言っているのか分からないとい節があるかもしれませんが、最後までお付き合い願えればと思います。

今、なぜ私たちが突然国立動物園なんて言い出したのか、という話をこれから45分話させていただきます。

私は、もう40年ぐらい前ですかね、旭山動物園に入りまして、それからずっと動物園の中で暮らしてきました。で、多くの動物園の友人を得て、多くの動物園の実情という話を聞いていろいろ考えてきたわけです。

そこで、現状のままでは、もしかしたら動物園自体が存在し続けることが非常に難しい、危ないのでは？ということをお話していきまして、たまたま意見の合う岩野さんとたまたま同じような議論をしてる中で、「本当にそうだよなあ、国立動物園だよなあ」という話から、実はこれは三年前の話ですけども、国立動物園のこの我々の会に発展したわけなんですけれど、なぜ今、国立動物園なのということをお皆さんもこれを機会にお考え願えればと思います。

1. 日本の動物園の歴史

日本の動物園の歴史、これは世界の動物園の歴史に比べたらずっと浅いです。これを動物園というかどうかは別にして、江戸時代、孔雀茶屋だとか花鳥茶屋という名前で動物たちが飼育されて、その動物を見に、人が集まってくるという文化を日本人たちが持っていました。“動物で客を呼ぶ文化”というのがすでに江戸時代からしっかりと存在していたということでもあります。

で、その後、動物園に関心のある皆さんだったらご存知でしょうけれど、明治6年、博物館が設立される時に動物飼養所、生きた動物をそこで展示する「熊室」というものが設けられてそこで熊が飼われ始めた。まさにこれが博物館で、ようするに客を呼ぶというよりも生きた熊を展示して、熊のことをしっかりと伝えるのですから、これが日本の動物園の始まりだったのではないかというふうに考えられます。つまり、日本の動物園のスタートは博物館だったのです。

その後、この東京大学に理学部生物学科が創設されて、そして明治15年、上野に新しい博物館が設立されました。その付属動物園として誕生したのが今の恩賜上野動物園であります。ですから、この時点では日本国立動物園が、設立されていたのです。この国立動物園が大正13年、当時の皇太子殿下(昭和天皇)のご成婚を記念して東京市に下賜されました。この時から、国立動物園ではなくて公立動物園の時代に入ってきます。国立動物園はここで無くなったのです。現在存在している動物園の中で京都、和歌山、大阪、鹿児島、名古屋、甲府という動物園がこの時点で公立動物園として存在しておりました。国立動物園だった上野動物園もこの公立動物園の仲間入りを果たします。

昭和14年、動物園協会というものが設立されました。16の動物園が名前を連ねておりました。翌年、日本動物園協会の第1回総会協議会が開催されております。その議題ですけど、まず、議題に挙がったのは動物の補充と動物の餌をどうやって入手するかという動物園運営の話し合いと、海外の動物園はどういう動物園が主体なのかということをお調査する海外先進動物園の調査が挙げられておりました。さて三つ目の議題は何だったと思いますか？三つ目の議題はなんと国立動物園設置方建議。残念ながらここでどんな議論が交わされたのか、私が調べている範囲では記録が見つかりません。もしかしたらどこかにあるかも知れません。何故この時点で国立動物園を作ろうと当時の人たちが考えたのか、もしかしたら同じようなこと、困難な面に直面して彼らもそう考え

たのかも知れません。ただそれは今となっては分からないところではあります。

終戦を迎えて、本当に動物園は壊滅状態に陥りました。そして戦後すぐに復興してきます。まさに戦後復興の象徴のように。全国の国民の活力ともなった動物園ブームが起きてきます。そこでは動物ショーに人気が集まりました。上野動物園の「お猿の電車」、実際に見られた方がいらっしゃると思うのですが、このお猿の電車も昭和49年に廃止されています。それまでずっと続けられておりました。

2. 戦後の動物園建設ブーム

平成11年、日本動物園水族館協会に加盟している動物園の数は98園に上ります。本当にこの時が日本の動物園界の最盛期だったんだと思います。それで今年加盟している園館は86園に減ってきました。これが雑駁ですけども日本の動物園の歴史です。

終戦当時15の動物園がありました。それから今グラフでお示したとおり、ずっと動物園が作られてくるのですが、このグラフはグレーが公立の動物園です。赤が民間の動物園です。ここで先ほどお話ししたとおり戦後復興とともに日本各地で動物園が造られてきます。これがまさに第一次動物園ブームだと思います。公立と民間の比率は21対5、圧倒的に地方の公立動物園がここで作られてきます。

しばらくして、ここに第二の動物園ブームというのが起きてきます。ここで比率を調べてみると公立帯民間は15対9です。民間がかなりの率を示しております。では、これは何なのかというと、9か所の民間動物園の中の7か所がサファリ系です。今も〇〇サファリというのがあります。そのサファリ系ができたのはだいたいこの年の間に集中しております。このようにして、日本の動物園は各地に広がっていきました。

3. 日本の動物園分布

地図で示しますと、このように日本各地どこに行っても動物園はあります。現在、例えば北海道。北海道には4つの動物園があって、この括弧の中は民間の動物園です。民間は0という意味です。岩手県には1つの動物園があって民間は0というようにして、ずらっと全国の動物園を示しております。先ほどお話ししましたとおり、加盟園館数は86園です。で、1都1道2府31県に協会加盟の動物園が存在しています。それ以外でも、各地に動物を飼育して観覧に供している動物園はありますが、これはこの中に入っておりません。加盟園だけということです。実は動物園がない県というのもあって12県(丸印がついていますが)ありますけれども、調べてみると協会に加盟していない動物展示施設が大なり小なり存在しております。そして86園のうちですね、18園が民間の動物園になっております。

4. 動物園の社会的役割

さて、そこで当初、動物園ができる時に動物園の社会的役割が何だ、ということは当然のように(こういう理念がなければ動物園なんか作らん方がいいと思いますが)、私が動物園に入ったころ、40年前となりますが、動物園とはこういう社会的役割があるんだということを習いました。

4つの役割、使命というのがあってですね、そして、教育としては理科とか社会とかの教育に役に立つのですよ。研究としては解剖学、比較分類学、それから飼育繁殖学、動物生理学こういうことを研究するのです。自然保護については種の多様性を目の当たりに見える施設として動物園は有効であると、というようなことを習います。特に娯楽ということに関しては家族で楽しめる健全な娯楽であるというように習った記憶があります。それともう一つ、知的好奇心を満足させる、もしくは知的好奇心を呼び起こす非常に貴重な場であるということも、大きな使命として掲げられております。実はこれは私の実感でもありますし、多くの動物絵にも聞いてもそうなんですが、子どもたちが動物園に遠くからやってきます。見学にやってきます、誰が担当しているのかという問題です。

我々は理科とか社会とかいうものを頭において動物園に教育的な効果があると言っているわけです。ところ

が、やってくる小学生に尋ねると、「動物園へ行く目的ですか？はい、遠足です」と答えます。ですから体育の人が担当しています。これが実態なのです。動物園に来るのは遠足の授業で来るわけです。だから先生は体育です。動物園から来た資料は理科の先生に行くのではなく、なんと学校では体育担当の先生の方へ行っちゃいます。これが実は我々の思っている方向とどうも利用している方の方向のズレかなというふうに私が実感した記憶があります。

それからもう一つ自然保護。どういうことをやるのか。そこにはっきりと書いてあったのが自然保護思想の啓蒙である。具体的になになにをやるというよりも自然保護というものの考え方を多くの人に伝えるんだということが使命として掲げられていました。

5. 社会的役割の変化

私は社会的役割は変化したと、この40年間で変化しているのだと思います。どのように変化しているのか。今、動物園が具体的に教育としてあげているのはほぼ生命教育、環境教育、そのほかいろいろありますけれども、きちんとした教育体系に則った教育というものを動物園は考えなければならない時期になったんだと思います。それと研究もですね、動物行動学、それから生息環境の研究、それから小個体群管理、これは動物園の世界だから必要であった小個体群管理という考え方が、実は知床のシマフクロウのように個体数が減少してきた野生の個体に対しても役に立つ、適応できる考え方だと思うのです。そういうことも動物園としてしっかりと研究しなければならない。それと人と動物の共通感染症、この問題についても厚生省は今“動物由来感染症”などと言っていますけれども、やはり動物園として、多くの人に分かりやすく“人と動物の共通感染症”であることを実際の研究を通して伝えることが大きな意味合いだというふうに考えております。

それから自然保護に対しては、もっと具体的に保護増殖、環境省の示している保護増殖のための新技術研究、それから生殖細胞の保存、こういうことも動物園はやってきておりますし、また今後はこれこそしっかりやっていかなきゃならない使命だと考えています。

それからもう一つ。緊急避難場所。野生で何かあったときにそれを受ける場所がない、いくら環境省といえども飼育施設は持っていません。地域の動物園はこの緊急避難場所であることを意識して仕事をしていく必要があると思います。それから環境保全活動、これも身近な環境について動物園は具体的、積極的に環境保全の活動について責任を持ってやっていかなければならないと思います。それと地域に立脚した野生動物の保護活動、これはやはりしっかりとやっていかなければならない。当たり前のことだと思うんですけど、この前のスライドに比べると非常に具体的に、この分野ではこの活動をするんだということが社会的役割として求められている。我々はそれを看板にしていきたいという意識を高く持つべきだというように思います。

そこでこの娯楽なんですけれども、娯楽はただレクリエーションを娯楽というふうに訳したんだと思うんですが、実はここも娯楽というただゲラゲラ笑って、「ああ今日は楽しかった」。これが娯楽だと思われると思うのですが、同じレクリエーションでも意味が違おうと思うんですよね。ここのはリ・クリエーション、ようするに人間性回復の場である。これは時代が進むにつれてどうしても人は人だけで暮らしていて心が傷つきガタガタになっていく時に、さまざまな生き物と空間を共有することによって人間性を回復していくのだ、そういう役割を有していると考えれば、この娯楽という役割も理論的に深くしていった方がいいのではないかと思います。

そもそも動物といるときの幸福感、これを感じない人間が野生動物を守ろうとするでしょうか。動物園に来て「いや～、気持ち悪い」、動物と一緒に空気を吸いたくないという人たちはどんな動物たちとも、共生は望まないとします。

ですから動物園の非常に大事なところは「動物園は何で楽しいのだろう。そうだ、多くの野生動物がいるからなんだ」。そういう地球を目指しましょうよというメッセージだと思います。動物といるときの幸福感をしっかりと味わってもらおう、これは動物園にとって非常に重要なことだと思います。なぜ重要か。結局、野生動物保護の原点はここにあるんだと思うからです。「だから自然保護の方も重要だし、そのための研究もやっていくし、そして多く

の人に教育をしていくんだ」という動物園には大きな戦略を描く時期だと私は考えています。

そして何といたっても動物園が存在する理由。動物園というのは多くの皆さまの賛同とともに、野生動物を守って地球を救っていく。そのことをしっかりと根っこに置いた動物園経営をしていかないと、動物園というものの存在が認められていかないというか、社会に支持されないのではないかと考えております

6. 日本の動物園は変わったか

今述べたとおり、動物園の役割に変化が生じたことは明らかだと思います。現実に40年動物園に居て、「変わった」と僕は実感しています。でも日本の動物園は変わったのでしょうか。日本の動物園、どうもやっぱりスタートの時に動物ショーがありました。いやレクリエーション施設として発展してきました。だから動物ショーはずっと好まれてやってきました。ゾウ、チンパンジー、ゴリラのショーも私は見たことがあります。それから、珍獣奇獣ブーム、ともかく、珍しい動物を見つけきて、マスコミを利用して宣伝するわけです。過去には雑種を繁殖させてそれを集客に使うということも見られていました。

それと遊園地の併設です。こども遊園著からジェットコースターに至るまで様々なタイプの遊園地が併設されています。これは何を意味するかというと、結局入園者数のみでその動物園の価値が評価されていることに原因があるのではないかと私は考えます。

それと動物学との関係が希薄です。研究施設とスタッフが極めて少ない。これは変な話ですけど日本の動物園の特徴ではないかとすら思っています。特に動物園では、多くの園長さん方が「動物園はねえ、研究施設ではないんだよ」という発言するのを何度も聞いたことがあります。「じゃあ、何なのですか」と問うと。「動物園の意義は動物を見せることなんだ。研究じゃない」。昔からこうだったのだと思うのですが、今でもこう言う人が多いのではないのでしょうか。でも、研究会などで多くの発表がなされています。どういうことかということ、動物園で行われている研究は、大学や研究所との共同研究で、独自の研究などあまり見られないのです。しかも動物園は常に研究材料の提供だけ。これでは動物園に研究成果は蓄積しません。それからもう一つ、研究をしっかりとやってところもあり、ほんとに頑張っているところもある。それらは個人的な努力で行われているのがほとんどで、動物園として取り組んでいる例はあまり多くはないと思います。

それから、生息地とのかかわりが極めて希薄です。野生での暮らし、生息地の環境というものを実感しない、体感しないで、動物を飼ってしまう。ということは何を意味するか。まず飼育することから始まってしまいます。どうやって飼育するか考える前に動物が来てしまう。そういうことを私も経験しましたし、多くの動物園の人たちも経験していると思うんですけども、こういうことをみると、40年前と今とはほとんど変化していないのではないかと私は思います。

7. 動物園への期待

で、もう一つ、動物園への期待ですけども、期待というのは我々、ここにいる我々の期待じゃありません。動物園を取り巻く多くの人たちの期待です。先ほど言ったとおり公立動物園は60園ほどあります。民間は18園です。それぞれで考え方がちょっと違うと僕は思っていたのですが、どうでしょう。公立の動物園、これはどういう動物園を作りたいか。公立ですから、その行政圏にいる住民がどのような動物園を望んでいるかによって大きく左右してきます。住民の意向調査の結果、「珍しい動物が欲しい、面白い動物が欲しい」となれば、これは住民が望んでいる動物園の主演となりますから、結局そういう動物を飼わざるをえない。そうすれば、集客できる動物園となる。先ほど言ったように動物園の評価というのはどうも入園者数によって評価される傾向になると思うのです。そうすると公立の動物園であっても、「動物園を設置してどの位くらい人が呼べるのか」、「客が来たらどの位の経済効果があるのか」ということが議論されてしまっています。でも、公立ですから、学べる動物園、体験できる動物園という看板は当然形として必要です。「それから地域の動物保護をやってください」とも言われます。でも地域の行政圏の中だけという意味です。地域の環境作り、これも行政の範囲の中です。こういうよう

な動物園が実は期待される動物園なのです、公立にとっては。

では民間はどうか。私は民間にいたことはないから分かりませんが、到津の森の岩野さんが民間の動物園にいましたので、民間はどうかと聞いてみると、なんとなく似ているんです。民間は住民じゃないけど、入園客が望む動物園となってしまふ。「お客さんが来てくれてなんぼだから」。それは公立よりもずっと厳しいわけ。客が望む動物園、結局同じように珍しい動物とか、面白い動物になってしまう。こういう動物を入れてお客に来てもらおう。結局、集客できる動物園が望まれる動物園像。まあ、学べることがなかったら動物園としてかっこ悪い。と、これもやるわけですよ。それから動物保護とか環境保全とか営業との関わりで判断される。これが民間の動物園ではないかと。そう考えると、民間も公立もたいして変わらないのではないかと私は考えます。

では、何が違うのか。実は運営意思の決定者と園長権限に大きな違いがあります。公立の動物園は運営意思の決定者は市長であり議会がそれを承認します。そして園長権限はあくまで動物園を管理すること。これが公立の動物園の園長の権限です。では民間はどうか。民間は園長が経営者になっている場合が多いです。それからある程度の権限を委譲されていますから、園長自身が経営しています。ここに大きな違いがあるのではないかとこのように考えています。

近年、私はこの傾向がますます強まっていると思います。そこに座っている岩野さんがですね、なんと行ったか。私に対して。「この現況を作ったのは旭山動物園である」って言ったんですよ。「お前が悪いんだ。お前があんなことをやって客を呼ぶから、みんな『ああ動物園って客呼べるんだ』と思ってこんなになってしまったんだ。お前が一番反省しろ」って言われたのですが、それはちょっと視点が違います。私は入園者を増やすために動物園改革をしたわけではありません。

8. 公立動物園は、通常どのようにして造られるのか？

また話は戻りますけれど公立動物園はどのようにして造られるか。皆さんは、あまり意識したことはないと思うのですが、実はこうして造られるんです。

動物園を作る時、市長は政策や選挙公約で、「私は動物園を作ります」と宣言します。まず、どのような動物園を造ろうかなど市長は考えていません。市長は動物園の専門家じゃないですから当たり前です。それで、市長に当選したとします。それだけでは動物園は出来ません、議会の議決が必要です。議会の議決を得ると、動物園建設準備室という準備組織を作るのです。それはどこでも同じです。ここの室長になるのは、まだ動物園の専門家は動物園にいませんから、〇〇部長とか〇〇課長とか、そういう人が室長になります。何をするか。先進動物園の視察をします、先進動物園として、既存の大都市動物園が選ばれます。それから市民からの要望を聞きます。そして、やることはこれを含めてコンサルタント会社に調査を依頼します。まあそうでないところもありますけども、動物園経験者を園長として招へいします。これは、園長は最初は動物園の人がいいかと思うんでしょうね。で、これでいけるよということで議会の議決を経て、盛大に開園。これが動物園ができる流れです。だいたい2年から3年かかります。この間、予算、つまり財政的な裏付けが必要となります。

そうするとどうゆう問題が出てくるか。動物園を設置した市長さんがいる間はいいのですが、動物園そのものが政争の具にされる可能性が非常に大きいのです。その次の市長に反対政党出身の市長がなったとするとどうなるかです。具体的な話をしますと、私がいた旭山動物園がそうでした。社会党系の市長が造ったのです。大反対したのは自民党でした。政権交代で自民党の市長が誕生しました。どうなったか。最初の一言、市長が「私は、動物園が嫌いだ」といいました。旭山動物園は、それから長い冬の時代を迎えることになりました。このように公立の動物園というのは政権交代の影響をもろに受けてしまいます、。

ただし、上野動物園のように大きくなってくると、絶対にそういうことはありません。上野動物園を嫌いだという知事はたぶんいないと思いますし今後も出てこないと思います。これは我々のような地方の貧弱な動物園だからこうなるんですね。それをいうのを忘れませんでした。大きな動物園はあまり影響されません。

これはどういうことかと言うとベースは役所的な発想です。これはもう明らかです。役所的な発想ということとは動物園といえどもこの枠から絶対に出られないということです。

で、先進動物園を見に行く、どこに行く。100%上野、大阪です。東北には、上野に行きますね。南西の方はたぶん大阪へ行くとします。まあ、だいたい二つとも行く。これがお手本になります。で、市民からの要望が来ます。100%パンダ、ラッコを期待します。「なぜ、うちにはパンダが居ないの」の話題は必ず出てきます。コンサル担当会社に調査を依頼します。どうなるか。ここに専門家はいません。もう模倣ばかりになります。その結果、日本全国同じような金太郎飴動物園ばかりができてきたわけです。

で、初代には動物園経験者の園長が居ました。動物園経験者の園長はどういうことになるか。わがままです、動物園の園長は。あの岩野さん見てお分かりのとおり、人の話はぜんぜん聞きません。そうすると役所としては邪魔になる。もう、べらべらしゃべるしね。それで2代目以降は管理中心なので、「あんなの要らない」となり、結局役所から管理するための園長が送り込まれてきます、これは。どこの動物園とは言いません。多くの地方の動物園ではこういう傾向にあります。で、議会の議決が必要です。当然これは政治的判断。こういうように公立の動物園は造られるので、先ほど言ったような結果になるということです。

議論の中心は「とにかくわが町にも動物園を」となります。市民のための動物園、市民が楽しむ動物園、経済効果もありますと訴えます。研究もやるんですよ、教育もやるんですよ、自然保護もやるんですよ、外部経済効果はあるんですよというのはいずれの議論です。これは私の経験です。

実際は、動物園建設に当たり、自治体が税金を投入するのです。その根拠に「地域住民のため」が要らないはずはありません。これ以外のことを入れてしまったら、「なんでそれをするために我々が税金を投入しなきゃなんないのか」という議論が絶対に巻き起こります。これでは、地方の動物園に「地球的視野に立て」と言っても難しいと思わざるをえません。まあ、「お前の動物園だけだろ」と言われたら「そうかも知れません」と言うだけで、話を聞いてみると、大体このような傾向にあるようです。

つまり、地方に新しい動物園を造る時に、お手本がぜんぜん無かったのです。いや、お手本は上野であり大阪であったのです。でも上野や大阪と言えども、上野は東京都民のための動物園だし、大阪は大阪市民のための動物園だった。ですから本当の意味のお手本ではなかったと言えます。それで、金太郎飴になったのではとされます。では、どうすればいいのか。遅ればせながらですけども、国がお手本を作ればよい。国がお手本を作ってくれればたぶん地方の動物園も同じようなベースで物を考えてくれるのではないかと思う訳です。

9. 動物園は野生動物を守れるか？

で、今回テーマとした「動物園は野生動物を守れるか」ということについてちょっと話をしますけれども、これは皆さんご存知ですか。日本動物園水族館協会というのがあって、種保存委員会という立派な委員会があります。これは過去にはありませんでした。20年前からの活動になります。動物園や水族館は地球上の野生動物を守り、次の世代へ引き継ぐ責任があると考えていて、それを実行するのが種保存委員会だと決めたのですら、これはまさに動物園の社会にはこれが必要なのだと協会はちゃんと言っているんです。実際に種別対象種というのは類別にして全部で11。括弧してあるのが実は日本産動物です。例えば猛禽類であれば8種類担当しているのだけ7種が日本産ですよという意味です。ペンギンは日本に棲息していませんから、日本産はありません。そういう意味です。142種もの動物種を飼育し、これらの動物をしっかりと次世代へ伝えていく責任があるのだと言っているわけです。外国産種は94です。国内種は48です。2対1の割合です、だいたいね。

10. 公立動物園は、野生動物を守れるか？

では、公立動物園は野生動物を守れるのか。まず国内種を考えます。緊急避難は動物園で受け入れましょう。それから地域で絶滅寸前の場合には捕獲してまでも保護増殖事業をやりましょう。トキは皆さんご存知のとおり最後の最後に捕獲に踏み切りました。いくらなんでも遅すぎる。その前にやらなければならないというのは今では自

明だと思います。捕獲もしくは保護された個体を使って保護増殖事業をやりましょう。次に来るのが繁殖・増殖ですね。それからその生物の環境生息調査なども地域であればできる。自然復帰ですが、ここで意味するのは、トキの場合とは違います。トキは絶滅してしまっただけからの再導入ですが、ここでは、今少なくなってしまった個体群のところ動物園で増やした個体を補充していくという考え方です。それで絶滅を回避する。それが自然復帰 (back to the nature) です。

この自然復帰というものも国内種なら視野に入れて活動できます。でも公立動物園でやろうとすると、もちろん民間でも同じですけども、許可するのは都道府県であり、環境省なのです。

でも、園長が「これをやろうよ、みんな」でと言ってくればできます。しかし調査となると県と市町村と一緒にやるわけです。自然復帰やるとなったら絶対に都道府県の関与が必要です。動物園が勝手にやれるものではないので、ほとんど都道府県マターというわけです。

まして外国種であれば、生息国の意向というのは当然必要ですよ。生息国の意向なくして我々が何をしても意味がないですよ。生息国との交渉も必要だし、人と動物との関わり、いろんな意味で生息国がどのような状況になっていて、今この動物が絶滅に向かっているのか、危険な状態になっているのかということは現地の人を抜きには語れません。もちろん環境、生息調査もしっかりやらないと、これはもう捕獲することも保護することも復帰させることもできません。こういうことは外国産種であれば到底、例えば旭川市だとか、失礼だけど東京都だってこれは継続してできそうにないと思います。というのは費用負担、人員の確保、飼養施設の確保、これらすべて一つの公立動物園でできるのかといたら、なかなか私は難しいんのではないかと思います。

でも国ならできます。外国産の動物も日本国としてならできます。アフリカの動物であろうが、インドネシアの動物だろうが日本国であれば相手国と一緒にできるわけです。国と一緒にやるのであれば、地方の動物園、公立動物園だって、国がやるのなら一緒にできる訳です。こここのところで、やはり国が出てくるというのは非常に重要なんだと私は考えます。

11. 国立動物園は、動物園の方向性を示す

国立動物園ですけどもこれはこれからの動物園の方向性をしっかりと示すべきなんだと思います。とにかく、今言われている持続可能な社会の貢献、故郷をまもる動物園に関する研究、自然環境・社会環境の研究、地域文化の研究。これもベースとしては重要な研究テーマであると思います。生物多様性にかかわる国際協力、これは他の海外の国々と一緒にできることで、野生生物との共生、農地と野生生物、水産と海棲動物、これらを全部含めて、しっかりと動物園は関わってやっていけると思います。そうすることによって、日本が国際的な責任を果たす。豊かな自然からの恵みを享受して経済的な発展を遂げたのは我が国です。その我が国がとにかく生物多様性に関してはしっかりと責任を持たねばなりません。多くの動物たちの今ある現状は、日本がこれまで得てきた恵みの結果なのだと思います。日本の戦後の発展を考えると、決して無関係だとは言えないはず。つまり、多くの動物の犠牲の上に今の我々の暮らしがあるのだと思えば、そこに国際的な責任を果たす義務があると思います。発展途上国への持続的協力と支援、生息環境の保全、生息地の確保というのも、それは発展途上国に「あんたやりなさいよ」と言っただけでなかなか無理です。それを日本が国家として共にやっていくのです。

それから国際的環境保全活動、生息地に暮らす人々が重要です。生息地に暮らす人々がしっかりとそこで今と同じじゃなくて、より文化的な暮らしをしていく。ただしそこにいる多くの野生動物との共生をしながら、ということが可能になるような支援を日本はできると思います。そこにはやはり大学、研究機関と共に我々動物園も関わっていればと思います。これがまさに国立動物園の考え方です。

国立動物園は、この方向に行くぞという大きなアドバルーンを掲げて、それに対して既存の地域の動物園と一緒にできることを探して、理念の共有をしつつ活動を一致させていく。それが日本全国の動物園が協力して

やっっていける非常に大きな社会・地球への貢献ではないかと私は考えております。

12. 国立動物園は…

国立動物園、我々の考えている国立動物園は国内外の動物園、大学、研究機関の総合的学術拠点として活用されるものです。地域的、分野的になされてきた研究を統合する役割を持っています。動物園というのは非常に広いすそ野があるし、対象も広いですから、細分されてきた研究を統合して、多くの方にお示するという役割が果たせるのではないかと思います。

動物園に蓄積された知見、特に多くの動物たちの繁殖、生理など、あらゆる野性動物に関する知見が蓄積されてきました。技術もそれに含まれます。それと大学、研究機関の研究成果に基づいて、野生動物とその生息地に対して持続的な協力支援を行っていく。これは国立動物園であれば可能です。先ほどお話したとおり、展示を通して研究成果を国民に直接広報することができます。年間4000万の人が、日本の動物園を訪れております。4000万人の人に、動物園は今こういう活動をしていますということを直接伝えることができます、そんなところは動物園だけではないでしょうか。その動物園で、研究の有用性、必要性を研究者が直接訴えることができます。研究費が削減されていく状況にある中で、国民から支持された研究費は当然優先順位が上がるべきだと思いますので、その訴える場の中心に国立動物園はなっていくと思います。動物園に関わる地域文化と自然科学との融合と創造を目指す。ということは世界的な視野で持続可能な動物社会の構築に寄与する、そのような活動を国立動物園が纏めて行きたいと考えています。

国立動物園はあらゆる方策で日本、世界の野生動物に責任を持ちます。そんな動物園が出来れば、日本の動物園すべて一緒になって、地球の野生動物の保全に役立てるのではないかと考えております。

ちょっと早口でしゃべりましたけれどこれで終わります。

ご静聴ありがとうございました